

特集

*

⑤

子ども・育児による親の発達

柏木恵子

家事・育児に積極的な父親ほど母親が職業を持つこと、社会参加することに積極的に賛成しています。そのような夫をもつ妻は革新的な性役割観を持っています。

家族システムの観点からのアプローチ

最初に、これからお話しするような研究をなぜ始めたかということからお話したいと思います。このシンポジウムは、牧野カツコ先生のお話を伺っていきましてあらためて驚いたのですが、心理学を専攻したのは司会の飯長先生と私だけで、あとは皆さん教育社会学の方々です。思っに、心理学が研究を厳密に、より分析的に、とやっっているうちにだんだん「たこつば」に入ったようになってしまっている。そうした現状のなかで、子どもの発達や家族の問題などを考えるときに、心理学だ、

家族社会学だとそれぞれ壁を作って、壁の向こう側のことには無頓着でやっっていることはとてもおかしい、大変残念でもつたいたいことだと思っのです。そのような意味で、私の話すことはともかく、このシンポジウムは学際的でとてもいいと思っっているのです。これから私がお話しする研究も、実はこれまでの私自身の研究の視点がいかに狭く、また偏っていたかの反省をこめた問題意識にもとづいているものです。今日のシンポジウムのタイトルは「子どもの発達と父親の役割」ですが、私

はそのタイトルとは少し違う視点からの話と研究をお話しします。

発達心理学の研究には、「子どもの発達に及ぼす親の影響」という類のタイトルの研究はこれまでに、文字通り数え切れないくらいたくさんあります。それらの研究では、親というものはいつでも「子どもに影響するもの」という、いわば大まおこがましい位置が与えられている、そういう視点に立った研究ばかりだといえると思っいます。その限りでは多くの成果をあげてきました。

ところで、「親は子に影響を与えるもの」という視点の研究ばかりだったのは、次のような背景があることに気づかされます。人間の発達を扱う学問は長いこと「児童心理学」あるいは「青年心理

学」と言われてきました。そうした時代には、「大人になること」が発達のゴールだと考えられていました。ある発達理論家(D. B. Harris)は、「competence」という概念を提出しました。competenceに至る過程が発達だ、つまり大人はcompleteな人だというのがですが、これは今思えば大胆というか大きな発達観ですが、この考えを皆が暗黙のうちに持っていた。つまり「発達のゴールとしての大人観」が、親を「子に影響する者」と位置づけてきたことの背景ではないかと思うのです。しかし、親の影響といたしながら、その親とはほとんどが母親であった、母親の影響や役割だけに焦点づけられていたということも、強調して付け加えたいと思います。そしてこのことがいままもって母子関係研究は花盛りということにつながっている次第です。

もう一つの問題は、最近、発達心理学で生涯発達ということがしきりにいわれます。大人は決してゴールではなく、大人も発達し続けるんだということは、日常経験に照らしてみれば、ごくあたりまえのことですね。けれども、学問の世界ではそのことはようやく最近いわれてきているのです。子どもが発達することについては、いろいろな経験によって学ぶだとか、新しいことをする、また

初めての役割を取るなかで育ち成長する、ということがいわれています。それと全く同じように、大人もいろいろなことを初めて経験する——職業につくことも、結婚することも、親になることも——、そのなかで学んだり成長したりすることで発達するもの。このことを、これまで無視してきたのはとてもおかしなことだと思つたのです。親になることは、成人期に初めて出会う経験、しかも苦楽を伴う長期にわたる経験で、この過程の中におとなの新しい発達があると思つています。親自身の発達に関心を持つのは、こうした理由からです。

さらに、これまでの発達心理学の中で親子を扱う時、家族システムの観点から欠けていたと思つています。子どもの発達への親(母親)の影響についての研究は沢山あるけれど、子どもと母親のみならず他の家族メンバーを含む家族関係そのものの研究はとても少ない。最近、母子相互作用過程の研究がさかんですが、それも結局は子どもにどのような影響を及ぼすかということに関心がある。家族のメンバーがそれぞれ新しい役割をとることによって、その人自身と家族全体がどう変化し発達するかは、これまで十分問われてこなかった

表1 調査対象——父親・母親——

母	〈夫(父) 学歴〉			人数
	中・高	専・短	大・院	
無職	16(11.3%)	9(6.3)	117(82.4)	142人
有職	30(27.0)	9(8.1)	72(64.9)	111
	46(18.2)	18(7.1)	189(74.7)	253
母	〈母学歴〉			人数
	中・高	専・短	大・院	
無職	20(14.1%)	54(38.0)	68(47.9)	142人
有職	30(26.8)	37(33.0)	45(40.2)	112
	50(19.7)	91(35.8)	113(44.5)	254
母	〈核家族の率〉			人数
	核家族	複合家族		
無職	88(79.3%)	23(20.7)	111人	
有職	102(76.7)	31(23.3)	133	
	190(77.9)	54(22.1)	244	

たと思つています。結婚した男女ははじめは夫と妻という立場だったのが、子どもが生まれることによって、親——父と母——になる。それによって、その人自身がどう変化するか、それと連動して子どもの側がどう変わっていくかという、システムとしての見方が欠けていたことを痛感しまして、そういう研究を試みたいと思つたのです。つまり、親役割を取るといことが、家族のメンバー、特に父と母の側にどのような変化をもたらすかを、人格発達の問題として考えたい。大げさないうと

家族発達と人格発達をドッキングさせるというのが私の問題意識でございます(このあたりのご参考文獻をこらんにいたしたい)。このようにして始めた研究の一端をこれから御紹介したい、そして御批判をいただきたいと思つています。

研究対象は、先の牧野暢男先生とは違って、現在乳幼児を育てている親——保育園、幼稚園の子どものお父さんお母さんたち——です。東京およびその周辺の園から対象を取つたためでしょう、父母の学歴は一般の分布よりやや高い方に片寄っております(表1)。お父さん用とお母さん用の質問紙をセットにして、園の子どもを通して配り回答を依頼しました。父母両方の回答が完全に揃ったデータだけを使って分析いたしました。調査内容は、先程の問題意識に基づいて、親となることによる人格発達が中心となっております。東京女子大学におりましたときから卒業論文準備中の学生さんたちと、親にインタビューしたり、計量的な調査をしたりして、「親の発達」を少しずつ勉強してきた結果から、親になることでどういうことが変わるかという中身をなるべく細かく引き出せるような質問項目群を収集しました。調査内容は、この「親の発達」に関する項目のほか、子どもや育児への感情、性別役割に関する質問を加え、更に

父親には育児・家事への参加をみる尺度も加えた質問紙を作成しました。性別役割について回答を求めたのは、子育てや親になることについての変化や子どもへの感情は、性別役割についての考え方が

「親になる」「子どもの成長発達」

では、主な結果をみていただきます。まず第一は、親になってどういうことが変化したかについてです。「親の発達」という問題にどう迫るか、これは皆様に教えていただきたい方法論上の問題です。ここで扱った方法も限界をもっているのですが……。親になることによってどのような人格的な発達が生じたかを、どのように調べるかが難しい。

人々はよく「子どもを持たなきゃだめね」とか、「子どもを持っている人はちがう」「親になって人間ができた」といったことをよくいいますね。それらの表現は、広い意味での親の発達をさしているのかと思つています。この表現から、親になった人、そでない人とを比較するという手が考えられますけれども、両群はさまざまな点で異質であり、親であるか否かだけを異にするような比較可

おそろく一つの核になっているのではないかと考えたからです。これは、かねて性別役割を青年成人、夫と妻について研究してきたことからの予想にもとづいています。

能な一群をうまく作ることはまずできない。それよりも同一人について親になる前からその後をずっとフォローしてゆくほうがより魅力的な一つの方法でしょう。しかし今回は、まず手始めに、すでに親である人に「現在の自分は親ではなかったときとくらべて、どういう点が発達したと思つか」という本人の認知によることにしました。自分の人格的、行動上の特性、社会的態度などについて「まったく変わらないと思つ、変わった、少し変わった」という形で評定してもらったのです。こうして、親になっての変化と想定した五〇項目の回答結果を、因子分析した結果が、表2のようになりました。

これを見ますと、親になっての変化として「ability」とか自分をコントロールできるようなことという面、あるいは視野が多角的に広がったと

表2 「親になる」ことによる成長・発達次元

第I因子 柔軟さ	角がとれて丸くなった。 考え方が柔軟になった。 他人に対して寛大になった。 精神的にタフになった。 度胸がついた。 小さなことにくよくよしなくなった。 いろいろな角度から物事を見るようになった。
第II因子 自己抑制	他人の迷惑にならないように心がけるようになった。 自分のほしいものなどが我慢できるようになった。 他人の立場や気持ちをくみとるようになった。 人との和を大事にするようになった。 自分本意の考えや行動をしなくなった。 自分の分をわかまえるようになった。 倏約するようになった。 思い通りにいかないことがあっても我慢できるようになった。
第III因子 視野の広がり	日本や世界の将来について関心が増した。 環境問題（大気汚染・食品公害など）に関心が増した。 児童福祉や教育問題に関心をもつようになった。 一人一人がかけがえのない存在だと思うようになった。 日本の政治に関心が増した。 弱い立場の人に思いやりをもつようになった。 協力することの大切さが分かるようになった。 どの様な人にもその人なりの良さがあると感じるようになった。 いろいろな人に支えられていると感じるようになった。
第IV因子 運命・信仰・伝統の受容	物事を運命だと受け入れるようになった。 運や巡りあわせを考えるようになった。 常識やしきたりを考えるようになった。 長幼の序は大切だと思うようになった。 伝統や文化の大切さを思うようになった。 人間の力を越えたものがあることを信じるようになった。 信仰や宗教が身近になった。 情にもろくなった。
第V因子 生き甲斐・存在感	生きている張りが増した。 長生きしなければと思うようになった。 自分がなくてはならない存在だと思うようになった。 子どもへの関心が強くなった。 より計画的になった。 子どもも好きになった。 目先のことより、将来のことを考えて行動するようになった。 一人前になった気がした。 気持ちが安定した。 より大人になったと感じる。 慎重になった。 自分の健康に気をつけるようになった。
第VI因子 自己の強さ	多少他の人と摩擦があっても自分の主張は通すようになった。 自分の立場や考えはちゃんと主張しなければと思うようになった。 物事に積極的になった。 目的に向かって頑張れるようになった。 妥協しなくなった。

ということ、物事には人間の努力や意志ではどうにもならないことがあるという謙虚な態度、自分の立場や主張をきちんと主張すべきだとする自己の強さなどの面が浮かび上がってきています。これらの面が、お父さん、お母さん両方のデータから確定されたのです。これは先程申しましたように、子どもを持たない人、親でない人と親との比較をしているのではなく、親自身による変化の認知という形でとらえている限りのことですが、親になって成長したと一言でいわれていることの中心がどのようなものが、明らかになったといえる

子育てによる人格的成長

次に、子どもや育児に対してどのような感情や意識を持っているかについてみます。これは因子分析で三つの面が分類できます。第一は育児や子どもを肯定的・積極的に行っているという面、次はその逆で育児によって自分の生活が制限されている感

もありましたように、お母さんの方が育児により多くコミットしていることとおそらく関係しているかと思えます。

次に、育児や子どもについての感じ方・考え方がどう違うのかの結果（表4）ですが、ここでは「制約感」についてのみ父母間に有意差があった、これはお母さんの方が強いのです。

このほかでは有意ではありませんが、数値上では「子どもは分身」はお父さんの方が強い傾向があるといえるでしょう。

このように育児や子どもに対する肯定感については、お父さんとお母さんの間には差がない。ところが制約感については、お母さんが非常に強いのです。このことは、母親が育児について肯定的な考え方を非常に強く持ちながら、一方で育児から解放されたいという気持ちや圧迫感を持っている

表3 親になることによる成長・発達

	父	母	P
第I因子 柔軟さ	2.40(0.74)	<2.83(0.61)	***
第II因子 自己抑制	2.57(0.72)	<2.99(0.62)	***
第III因子 運命・信仰・伝統の受容	2.71(0.73)	<3.12(0.54)	***
第IV因子 視野の広がり	2.21(0.67)	<2.60(0.63)	***
第V因子 生き甲斐・存在感	2.82(0.57)	<2.95(0.53)	**
第VI因子 自己の強さ	2.35(0.69)	<2.52(0.58)	***

注) *P<.05, **P<.01, ***P<.001 平均得点(標準偏差)

表4 父親・母親における育児の感情

	父親	母親	P
第I因子：育児への肯定感	2.91(0.60)	2.98(0.55)	
第II因子：育児による制約感	1.88(0.46)	<2.24(0.51)	***
第III因子：「子どもは分身」感	2.58(0.85)	>2.41(0.78)	**

注) *P<.05, **P<.01, ***P<.001 平均得点(標準偏差)

割をどうとらえるかについて検討してきており、既に三つの因子を同定しています。そこで、この調査では同じ質問項目を用い、そこで確定されて

な変化に関しては、すべての面に有意差があった、お母さんの方が大きな変化をみせていることを示しています。これは、先程の牧野先生のご発表に

新・保育入門

別冊 発達 14
森上史朗編

B5判装力バー型買/定価二、四〇〇円(税込)

子どもたちの発達にもっとも適した環境を用意し、見守り、待ち、援助する保育。領域の基礎を掘り起こし、実践に新しい視点を提供するために保育内容を本質的に問い返す。現代日本の保育に関する統計を網羅し、検討する章を付した。

●目次

- 1 《保育内容を再考する》
吉村真理子・庄司 康生
中村 征子・渡辺 英則
戸田 雅美・黒川 建一
藤野 敬子・高杉 自子
- 2 《新しい保育実践の創造》
田中 昭子・中臣 浩子
吉村真理子・菅田 栄子
- 3 《保育の基礎を確立する》
小嶋 秀夫・松井 とし
竹内 順子・本田 和子
森上 史朗
- 4 《保育の現状と課題》
安 典子・山内 啓江
高杉 展

ミネルヴァ書房

表5 母親の就業状況の比較

親としての発達	父親		母親	
	配偶者無職	有職	無職	有職
第I因子 柔軟さ	2.38(0.77)	2.37(0.71)	2.85(0.55)	2.81(0.65)
第II因子 自己抑制	2.59(0.73)	2.51(0.70)	3.07(0.55)	>2.85(0.69) **
第III因子 運命・信仰・伝統の受容	2.70(0.77)	2.75(0.72)	3.21(0.50)	>3.04(0.58) *
第IV因子 視野の広がり	2.24(0.70)	2.15(0.65)	2.66(0.53)	>2.37(0.68) ***
第V因子 生き甲斐・存在感	2.86(0.55)	2.71(0.59)	3.06(0.47)	>2.80(0.61) **
第VI因子 自己の強さ	2.35(0.71)	2.31(0.69)	2.55(0.55)	2.48(0.61)
子どもへの感情				
第I因子: 育児への肯定感	2.99(0.62)	2.86(0.64)	3.03(0.57)	2.99(0.56)
第II因子: 育児による制約感	1.77(0.49)	<2.01(0.43)	2.22(0.55)	2.16(0.43)
第III因子: 「子どもは分身」感	2.66(0.78)	2.46(0.88)	2.46(0.74)	2.29(0.84)
性別割親				
第I因子: 革新的(非伝統的)性役割	2.16 < 2.48 (0.50) (0.57)	***	2.30 < 2.76 (0.43) (0.54)	***
第II因子: 男性の育児・家庭参加	2.78 < 3.02 (0.51) (0.52)	***	3.11 < 3.29 (0.44) (0.47)	***
第III因子: 女性の社会進出	2.03 < 2.28 (0.42) (0.41)	***	2.20 < 2.58 (0.40) (0.48)	***

注) *P<.05, **P<.01, ***P<.001 平均得点(標準偏差)

ることを示しています。これは既に大日向さんなどの研究でも指摘されてきていることですが、それがあらためてこんな形で出てきていて、今の母親さんが置かれているアンビバレントな状況を

端的に示しているかと思えます。次に、「性別割親」についての結果ですが、これについてはすべての次元で有意な性差があります。すべての次元(また項目ごと)にみてもすべての項目

った事柄について、女性の方がより肯定的な意見をもっているのです。このような傾向は、これまで私どもがさまざまなサンプル——学生、結婚しているいろいろな年齢層の夫と妻——について検討したところでも見出されている一貫した結果です。つまり、性別割親に関する意見すべてにおいて女性、母親の方が性別分業的意見に批判的であり革新的な考えを持っているのが現状だといえるでしょう。このことは、母親群父親群を両群の平均でみた場合でも、父(夫)と母(妻)をペアごとにみた場合でも、同様の結果がみられました。

母親が働いていると父親の育児観は変わる

その次に御報告しますのは、母親の就業との関係です。このサンプルは、先程のサンプルからもわかるように、保育園と幼稚園両方からとっています。それは、母親が働いていることで子どもへの感情や親になつての変化などにどういふ変化があるかに関心があつたからで、有職と無職(専業主婦)のお母さんを半分く

らいつつとりたいたと考えたからです。もっとも有職といつても、フルタイムだけでは少数が足りなかつたので、フルタイムに近いほど週のうちのかなりの時間を働いている人達も少し含めて有職群としました。そして、有職、無職群間にこれまでみてきた点について差があるかどうかを見たのが、表5で、人格的な変化、子ども観、性別割親の得点が示してあります。ここでは、奥さんが働いていない場合と働いて

いる場合の父親の群、無職の母親と有職の母親とを比較しています。さて、まず人格的变化についてですが、お父さんの場合には、奥さんが働いているかどうかによる差はまったくありません。ではお母さんの方はどうかというと、專業のお母さんの方が、親になってからの変化が大きいという結果です。この結果をどういふふうに考えてたらいいか、複雑で難しい問題です。というのは、一つには、ここには先程申しました方法論の問題が絡んでいると思われるからです。いろいろ考えてみますと、有職の母親群というのは、親になる前からそのあともずっと職業生活の中でもいろいろ経験し鍛えられている、そのことによつて変化している可能性が考えられます。だから「親になつて変わった」という認識は、無職群に比べて薄いのではないかと考えることができるかもしれない。他方、無職の母親の方は、何といつても有職の母親よりも育児へのコミットメントが大きい、だから変化が大きいかもしれない……。こういう風にいろいろなことが考えられます。この点は、少し違う方法でさらに検討する余地があると思つておきます。

一次に育児感についてですが、ここには、母親の職の有無で父親の側に大きな変化があるのです。父親の子どもや育児についての感情や態度は、奥さんが働いている場合の夫と專業の奥さんの場合の夫を比べると、前者で育児による制約感が有意に高いのです。もっとも、それでも女性(母親)並みにはなっていないのですが……。さつき御覧いただいたように、この(制約感)は女性(母親)

育児参加している父親はいつもアンビバレント

そこで次に御覧いただきますのは、父親の育児参加についてです。これについては先程の牧野先生の御報告にもありましたが、ここでは子どもがもっと小さい時にどうなつていのかをみました。とりあげた項目は、食事の支度、入浴させる、園への送り迎えなどで、どういふ項目で変わってくるかの詳細は、ここでは省きますが、一、二例をみますと、こんな具合です。例えば、有職のフルタイムの奥さんを持つているお父さんの場合、園への送り迎えなどがぐっと増えています。無職の奥さんを持つお父さんは、そういうことは稀にしかしないというふうに、両群の分布はかなり偏つてきています。つまり、妻の職業の有無によつて、夫(父親)の育児・家事へのコミットメン

トはかなり性格が違つていえます。項目によって多少違いますが、これらの項目全部を合計した総合得点で以下の分析は扱つてにいたしました。この家事、育児参加得点の全サンプルの分布が図1です。この分布から、人数にしたいたい六〇人位に当たる人(父親)を分布の両群から取り出し、高得点の方を育児家事へのコミットメントが高い群(H)、低得点の方を低い群(L)としました。そして、先程の牧野先生がなされたのと同じように、家事・育児参加度によつて父親の意識が変化しているかどうかを二群について比較検討しました。その結果が、次の表6です。少なくとも、人格的变化の面については、このデータでは家事・育児参加の多少による差はあり

特集●父親の役割●

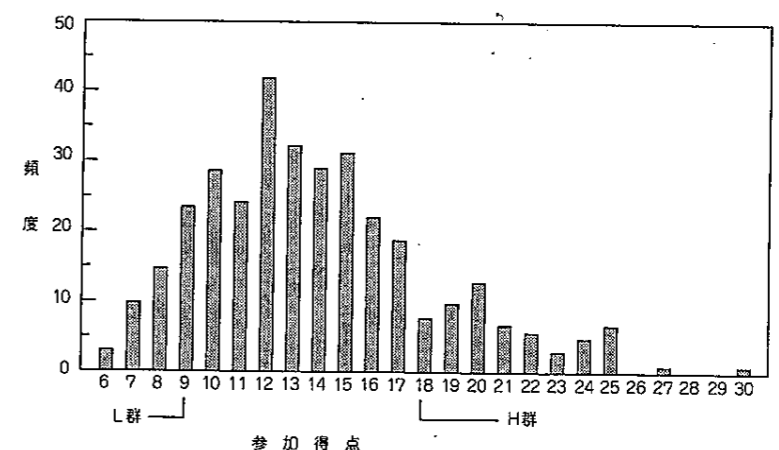


図1 父親の家事・育児参加得点分布

表6 父親(夫)の家事・育児参加の高・低による父親・母親の育児感の比較
—平均得点とSD—

変化	父		母	
	L	H	L	H
第I因子:柔軟さ	2.34 (0.92)	2.36 (0.68)	2.83 (0.56)	2.72 (0.64)
第II因子:自己抑制	2.56 (0.74)	2.49 (0.75)	2.95 (0.56)	2.78 (0.69)
第III因子:運命・信仰・伝統の受容	2.56 (0.83)	2.67 (0.76)	3.18 (0.49)	3.07 (0.64)
第IV因子:視野の広がり	2.20 (0.79)	2.09 (0.69)	2.69 (0.58)	2.31 (0.74)
第V因子:生き甲斐・存在感	2.88 (0.46)	2.63 (0.71)	2.86 (0.55)	2.85 (0.56)
第VI因子:自己の強さ	2.38 (0.79)	2.25 (0.68)	2.50 (0.45)	2.33 (0.63)
育児感				
第I因子:育児への肯定感	2.70 (0.55)	2.86 (0.68)	2.80 (0.49)	3.12 (0.46) **
第II因子:育児による制約感	1.96 (0.47)	1.94 (0.50)	2.46 (0.51)	2.14 (0.46) ***
第III因子:「子どもは分身」感	2.68 (0.73)	2.30* (0.89)	2.31 (0.74)	2.25 (0.89)

注) *P<.05, **P.01, ***P.001

ません。先程の牧野先生のデータでは差がみられたのですが、この就学前の時点では、育児・家事に参加しているか否かは親になることによる人格的面的についてはほとんど差がないのです。牧野先生の結果との違いは、もう少し長期的な育児・家事経験の長さのちがいにいるのかもしれない。

では、父親の育児参加度で差が出てくるのはどこかということ、まず、育児や子どもについての感情については、まず、お母さんですが、夫の育児へのコミットメントが高い群で、子どもへの肯定的な感情が増す、子どもに対する積極的な気持ちが出てくる、こころいう意味でよい変化がこの群

は、父親の育児参加度で差が出てくるのはどこかということ、やはり夫が具体的に育児に参加していることにもとづいていることが確かめられたといえるでしょう。

もうひとつは、「子どもは分身」という感情で変化があります。これは先程一寸ふれましたように、もともと男性(父親)に高かった感情なのですが、

これが育児・家事参加が低い人で高いのです。子どもは分身だ、といった抽象的・観念的なことは子育てを直接やっていない時に出てくる、けれども、実際に子育てをするようになると、子どもへの感情は少し違ったものに変わってくるという

ことなのでないかと思えます。そしてこのような子ども感の変化が長期的に見るとやがて父親の人格的変化(牧野暢男先生が示された)につながってゆく可能性を予想しています。

夫婦の考えが育児を決める

最後に、性役割観についてみますが、これは育児・家事にどうかかわるかという現実の生活・行動の背景として検討してみました。性役割についてどう考えているか、つまり、どういう生き方を考えているかが、具体的な生活と関係しているのではないかと考えたのです。最初に御覧いただき

る。このことは、性による役割差をなるべく小さく考える、男性も家事・育児を担うべきであり、女性の社会進出を積極的に肯定するという革新的な考え方の持ち主(男性)が、実生活でも家事・育児により多くかかわっていることを物語っています。つまり、言行一致といえるでしょうか。男性(父親)は職業が忙しい、仕事が長時間なために育児・家事にかかわれないと、しばしばいわれます。もちろん、時間あつてのことにはちがいがありません。しかし別な研究で、就業時間の長短と育児・家事参加とは必ずしも対応しないというデータもあり時間の有無が主変数ではないことは明らかです。むしろ、育児や家事を自分の人生にどう位置づけるか、性別による分業をどうみなすかといった価値観が大きく関与していることを

より革新的な意見をもっているのですが、父親の育児・家事参加度によるL群とH群間に、父親・母親いずれでも非常につきりとした差が出てまいりました。特にその差は父親の場合に顕著です。つまり大いに育児・家事に参加しているお父さん(ちなみに、この群には妻が有職のケースが多い、逆に参加L群には、専業主婦の場合が多い)群は、性役割についての考え方がより革新的になってい

ます。もちろん、時間あつてのことにはちがいがありません。しかし別な研究で、就業時間の長短と育児・家事参加とは必ずしも対応しないというデータもあり時間の有無が主変数ではないことは明らかです。むしろ、育児や家事を自分の人生にどう位置づけるか、性別による分業をどうみなすかといった価値観が大きく関与していることを

このデータは示唆していると思えます。もちろん、母親の側にも、夫の育児・家事参加の高低によって性役割観に差がみられています。すなわち、夫の育児・家事参加の高いH群の妻II母親の性役割観は、L群の母親に比べて有意に革新的です。この意味で、夫と妻の性役割観は相互に近似したものだといえるのでしよう。性役割について、また男性の仕事、女性が働くことについて、夫と妻とがどのような考えを持っているかが、その家庭の現実の生活スタイル、とりわけ子育ての実態を決定していることが示唆されます。L群も「言行一致」という点ではよいのですが、父親の育児参加が低い時、その配偶者である母親は決しておだやかではなく、育児不安・拘束感を強く抱いているという結果は、家庭のあり方、父親・母親の役割を考える上で無視できないことだと思います。

引用文献

牧野カツコ 一九八二 乳幼児をもつ母親の生活と「育児不安」 家庭教育研究所紀要3 三四—五六頁

柏木恵子(編著)一九九三 父親の発達心理学—父性の現在とその周辺—川島書店

